

### 19世紀初頭のミラーノとスカラ座

《絹のはしご》の成功でヴェネツィア人のアイドルとなったロッシーニは、初演に先立ちミラーノの劇場と契約を結んでいた(後述)。

ミラーノは1796年から1814年まで一時的なオーストリア軍の復帰を除いてフランスの支配下にあり、その間1797年にチザルピーナ共和国(Repubblica cisalpina)、1802年にイタリア共和国(Repubblica italiana)、1805年にイタリア王国(Regno italico)に編入されるなど、大きな政変を経験していた。ミラーノのスカラ座(Teatro alla Scala)は、正式名称を新ミラーノ大公劇場(Nuovo Regio Ducal teatro di Milano)といい、オーストリア・ハプスブルク家支配下の1778年8月3日、アントーニオ・サリエリ作曲《見出されたエウローパ(Europa riconosciuta)》で開場して以来、北イタリアを代表する劇場として盛名を馳せてきた(図42)。フランス支配時代には政府の管轄下に置かれ、内務大臣がミラーノの諸劇場を統括する総監督を置き、上演に関する基本事項は劇場委員会が決定していた。



図42 19世紀のスカラ座

1811年7月9日に内務大臣が総監督に示した、1812年春～翌1813年謝肉祭にスカラ座がコンタクトを取るべき一流作曲家と歌手の文書が現存する。そこには一流のマエストロ(maestri de cartello)として、パーエル、マイル、ジェネラーリ、パヴェージ、モスカ兄弟(ジュゼッペとルイーダ)、ニコリーニ、フェデリーチ、ライ、オルランディ、ファリネッリ、グリエルミ、ヴァイグルの合計13人の作曲家を挙げ、あまり好ましくない作曲家としてコルデッラとモルラッキの名前が書かれている<sup>1</sup>。この段階で名前が挙がっていないロッシーニが新作を求められた理由は不明だが、可能性として1812年8月17日に始まる秋シーズンのプリマ・ドンナを務めるマルコリーニの関与が考えられる。前章で述べたように、マルコリーニはロッシーニと多くの係わりがあったからである(スタンダールも彼女が働きかけたと推測)。同シーズンの歌手団には、《幸せな間違い》初演歌手フィリッポ・ガッリも含まれていた。ロッシーニとスカラ座の契約に関する史料は未発見であるが、フェッラーラから母に宛てた1812年2月18日付の手紙に、「ミラーノのための契約を結んだことをお知らせします。なかなかの報酬で、[それを知った人は]目が眩むほど腹を立てることでしょう」と書かれている<sup>2</sup>。

### スカラ座デビュー作《試金石》の大成功

母に宛てた手紙から、ロッシーニは当初6月12～15日の間にミラーノに移るつもりでいたが(5月29日付)、フェニーチェ劇場との契約がまとまるまで出発を控え(6月20日付)、6月30日にもまだヴェネツィアにいたことが判る(同月30日付)<sup>4</sup>。そして7月初めにミラーノに移ると、同月11日付の手紙に「ぼくは導入曲とマルコリーニのカヴァティーナを作曲しました。いい音楽です」と報告し、さらに「この地でローマのオペラの楽曲が出版されます。ぼくの音楽作品も世界中のものになります」と誇らしげに記している<sup>5</sup>。それゆえ9月19日に予定された二番目の新作を求められたロッシーニは、7月初頭に2幕のメロドラマ・ジョコーブ《試金石(La pietra del paragone)》のテキストを部分的に受け取っていたようだ。しかし、スカラ座の総監督カルロ・ブレンターノ・デ・グリアンティ(Carlo Brentano de Grianty,?)の書簡で確かめられる台本の完成は8月21日以前である<sup>6</sup>。秋のシーズンは8月17日にジュゼッペ・モスカ作曲《男たちの中の獣(Le bestie in uomini)》初演で開幕し、大成功を収めていた(シーズン中に33回上演)。

《試金石》の台本作者ルイーダ・ロマネッリ(Luigi Romanelli, 1751-1839)は、1799年からスカラ座に台本を提供しており、ロッシーニは8月29日付の母宛ての手紙に、「ぼくの台本はいいもので、うまく音楽を付けられます。失敗ならばぼくは自分を去勢させるよ」とユーモラスに記している<sup>7</sup>。物語には当時のジャーナリズムに対する風刺が含まれ、登場人物は真面目な人物(アズドゥルーバレ伯爵、クラリーチェ)とその他の滑稽な人物に大別でき、新聞記者(マクロービオ)と三文詩人(パクービオ)の存在も際立っている(図43)。

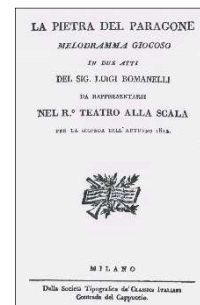


図43 《試金石》初版台本

#### ■あらすじ

**第1幕** 金持のアズドゥルーバレ伯爵は結婚を望んでいたが、財産目当ての男爵令嬢アスパージアとそのライヴァルのドンナ・フルヴィア、友人気取りの新聞記者マクロービオや三文詩人パクービオがいて、誰を信用してよいか判らない。一計を案じた伯爵は外国人の債権者に変装し、伯爵の破産と財産差し押さえを宣言する。すると彼らは伯爵にそっぽを向き、心の優しい侯爵未亡人クラリーチェと詩人の騎士ジョコンドだけが真の友

人と判る。

**第2幕** 名誉回復を望むアスパージアとフルヴィアは仲間に決闘をけしかけるが、騒ぎが収まるとみなで森に狩に出かけ、嵐に遭遇する。ジョコンドに言い寄られたクラリーチェが伯爵に誤解されると、クラリーチェは男装して自分の兄と偽り、「妹がこの地を去る」と告げる。驚いた伯爵が自殺を決意し、その姿に感動したクラリーチェが変装を解いて伯爵と結ばれる。

作曲は順調に進むかに思われたが、ロッシーニは8月末に高熱で寝込んでしまった(マラリア熱と推測)。その噂は両親の耳にも届いたらしく、ロッシーニは前記8月29日付の手紙で病気を否定したが、9月9日付の手紙では「忌々しい風邪のせいで2回も高熱を出しました。でも、あなたがくれた有名なキナの薬(註:キナの樹皮から作られた解熱とマラリアの特効薬。キニーネの名称でも知られる)を飲んでいるので、もう全然熱がありません」と記している<sup>8</sup>。けれどもスカラ座の医師モレスキ(Moreschi)は病がなお数日続くと判断し、総監督ブレンターノは9月10日付の書信で内務大臣ルイーギ・ヴァッカーリ(Luigi Vaccari,1766-1819)にロッシーニのオペラに未完の曲が七つあるので3番目に予定するパヴェージ《マルカントーニオ殿》を先に上演してはどうか、と尋ねている<sup>9</sup>。しかしヴァッカーリは返書でデ・グリアンティが未完の曲数を誇張しているとし、実際のそれは4曲だからロッシーニは同月26日までに完成できるとの見通しを示した(9月11日付)<sup>10</sup>。

病をおして仕事をしたロッシーニは、9月9日に続いて書かれた日付不詳の母宛ての手紙に「ぼくはとても健康で、あなたがたが信じるような不具合はありません」と記し、「ぼくはミラーノでとても良い意見を聞き、喜んでいきます。いま書いているオペラのさまざまな曲を見た多くの音楽家とマエストロが褒めてくれているのです。ですから作品が成功すると期待しています」「ぼくはフィナーレを作曲しました。それはぼくに血の汗をかかせましたが、上演の最初の晩に見せる血ではないでしょう」「聴衆の判断を待つことにしましょう」と述べている<sup>11</sup>。この記述から、劇場側がロッシーニに作曲中の楽譜を提出させて複数のマエストロに調べさせ、結果を内務大臣に上げたことが判る。当時スカラ座でマエストロ・アル・チェンバロを務めていたのが後にヴェルディの師となるヴィンチェンツォ・ラヴィーニャ(Vincenzo Lavigna,1776-1836.)で、管弦楽団の指揮者[カーポ・ドルケストラ]をアレッサンドロ・ロッラ(Alessandro Rolla,1757-1841)が務めた<sup>12</sup>。ラヴィーニャはナポリのサンタ・マリーア・ディ・ロレート音楽院で10年間学び、ミラーノでパイジエッロにも師事した作曲家で、1802年にデビュー作《恋ゆえに口のきけぬ女(La muta per amore)》をスカラ座で初演してマエストロ・アル・チェンバロに就任、1810年までに9作のオペラを作曲初演していた(うち5作がスカラ座初演)。ロッラも著名なヴァイオリニスト兼作曲家であることから、この2人がロッシーニの楽譜を検分した可能性があり、その評価は後のスカラ座での活動にもプラスに働いたに違いない。

結果的に初演は一週間遅れたが、ロッシーニは序曲を含むすべての楽曲を完成できた(旧作からの転用や改作は後述)。第1幕のレチタティーヴォ・セッコもみずから作曲し、第2幕のみ複数の協力者に委ねている。ロッシーニが喜歌劇のレチタティーヴォ・セッコを作曲したのはこの《試金石》が最後で、その後のファルサとオペラ・ブッフアでは第三者に委ねる分業制に従っている<sup>13</sup>。初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
女公爵クラリーチェ Marchesa Clarice(コントラルト)	マリーア・マルコリーニ(Maria Marcolini,1780頃-?)
男爵夫人アスパージア Baronessa Aspasia(ソプラノ)	カロリーナ・ゼルビーニ(Carolina Zerbini,?-?)
ドンナ・フルヴィア Donna Fulvia(ソプラノ)	オルソラ・フェーイ(Orsola Fei,?-?)
アズドゥルーバレ伯爵 Conte Asdrubale(バス)	フィリッポ・ガッリ(Filippo Galli,1783-1853)
騎士ジョコンド Cavalier Giocondo(テノール)	カルロ・ボノルディ(Carlo Bonoldi,1783-1846)
マクロービオ Macrobio(バス[ブッフオ])	アントーニオ・パルラマーニ(Antonio Parlamagni,1759-1838)
パクービオ Pacubio(バス[ブッフオ])	ピエートロ・ヴァゾーリ(Pietro Vasoli,?-?)
ファブリーツィオ Fabrizio(バス)	パオロ・ロッシニョーリ(Paolo Rossignoli,?-?)

楽曲は書き下ろしの序曲[シンフォニーア。後に《タンクレーディ》序曲に転用]と、19のナンバーからなる。クラリーチェ登場のカヴァティーナ〈ああ神さま! あの人が私に言ったなら(Quel dirmi, oh Dio!) (N.3)は序奏にホルン独奏を伴い、前半部に伯爵のこだま(エコー)を取り入れている(こだまの部分の音楽はN.5クラリーチェと伯爵の二重唱の中間部で再帰)。マクロービオのアリア〈近づいてくるのは誰だ?(Chi è colei, che s'avvicina?) (N.8)は滑稽なパルランテの前半部と尊大な性格を表現する後半部からなり、ロッシーニのバツソ・ブッフオのアリアのモデルとなる。アンサンブルは書き下ろしと純然たる転用があり、第1幕の四重唱〈あなたは欲しがり、欲しがらない(Voi volete, e non volete) (N.7)は《絹のはしご》の四重唱や《バビロニアのチーロ》の三重唱の着想と素材を発展させ、第2幕の五重唱〈望むなら、希望をもってください。でも黙って(Spera, se vuoi, ma taci) (N.14)は《ひどい誤解》



**全1幕** 嵐の夜の旅籠。ドン・パルメニオーネは雨宿りに来たアルベルト伯爵から結婚のためナポリへ行くと聞かされる。伯爵が慌しく立ち去り、召使が2人の鞆を取り違えると、美しい女性の肖像を見つけたパルメニオーネは伯爵を騙って彼女を妻にしようと思いつつ。一方、婚約者の顔を知らぬベレニーチェは、求婚者の誠実さを試すべくエルネスティーナと服を交換して待ち受ける。最初に来たパルメニオーネは肖像と顔が違うと思いつつエルネスティーナに求婚、彼女も贋伯爵に惚れてしまう。遅れて現れた伯爵はベレニーチェに求婚するが、「あなたの花嫁は他にいます」と言われてしまう。ベレニーチェの叔父ドン・エウゼービオも加わって一同混乱するが、ベレニーチェに偽伯爵を見破られたパルメニオーネが「友人エルネスト伯爵の妹を探しに来た」と告白してエルネスティーナが伯爵の妹と判明、2組の結婚がまとまる。

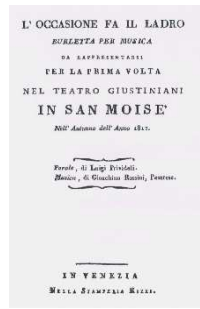


図 45 《なりゆき泥棒》初版台本

ロッシーニが15日間ではなく11日間で《なりゆき泥棒》をほぼ作曲したことは、11月18日に母に送った手紙に「11日間のぼくの音楽は、稽古でとても喜ばれています」としたことで明らかである<sup>20</sup>。猛烈なスピードで作曲したことは、自筆楽譜に書き急いだ跡があり、数人の協力者の筆跡が混在することでも判る<sup>21</sup>。その一方、旧作からの転用は序曲の嵐の音楽のみで、ロッシーニが一气呵成に作曲したことが判る。それゆえ初演4日後の『アドリア県新聞 (Giornale dipartimentale dell'Adriatico)』(11月28日付)に、「マエストロ・ロッシーニ氏はその音楽を11日間で書いた。燃え上がる天才の勢いにかられたとしても、それはあまりに短い期間だった」と書かれたのである<sup>22</sup>。初演配役は次のとおり。

役名と声種	歌手
ドン・エウゼービオ Don Eusebio(テノール)	ガエターノ・ダル・モンテ(Gaetano dal Monte,?-?)
ベレニーチェ Berenice(ソプラノ)	ジャチンタ・カノーニチ=グイーディ(Giacinta Canonici-Guidi,?-?)
アルベルト伯爵 Conte Alberto(テノール)	トンマーゾ・ベルティ(Tommaso Berti,?-?)
ドン・パルメニオーネ Don Parmenione(バス)	ルイーダ・パチーニ(Luigi Pacini,1767-1837)
エルネスティーナ Ernestina(メゾソプラノ)	カロリーナ・ナゲル(Carolina Nagher,?-?)
マルティーノ Martino(バス)	フィリッポ・スパダ(Filippo Spada,1789頃-1838)

作品は九つのナンバーからなり、序曲を独立させずに導入曲に繋げて第1曲としたのは斬新な手法で、それ以前のロッシーニ作品に例がない。序曲の主部に当たる嵐の音楽は《試金石》第2幕嵐の場面の再使用で、《なりゆき泥棒》における唯一の転用となっている。これは嵐で始まる劇の設定とも関連し、導入曲は愛の思いを歌うアルベルト伯爵の叙情的なソロと嵐の描写を挟み、陽気な男声三重唱で閉じられる。続くパルメニオーネのアリア〈何という運命、何という偶然 (*Che sorte, che accidente*)〉(N.2)は実質的にマルティーノとの二重唱であり、人物が順次カヴァティーナを歌う定型を逸脱する。ヒロインのベレニーチェは登場のカヴァティーナ〈その時が近づく (*Vicino è il momento*)〉(N.3)で見知らぬ婚約者への期待と不安を叙情的な旋律で歌い、フィナーレ前の華麗なアリア〈あなた方は花嫁を求め (*Voi la sposa pretendete*)〉(N.8)でコロラトゥーラを披露する(その第一部分は実質的に三重唱)。(図 46) 図 46 《なりゆき泥棒》初版楽譜(リコルディ社。ミラーノ、1855年)



中央に位置する五重唱〈この礼儀正しく優雅な者は (*Quel gentil, quel vago oggetto*)〉(N.4)は、バスの喜劇的語法と女声の柔らかな旋律が織りなすパルメニオーネとエルネスティーナのデュオで始まり、アルベルトとベレニーチェの重唱と経過部を挟んでエネルギッシュなアンサンブルで閉じられる。ベレニーチェとパルメニオーネの二重唱〈あなたが花嫁だって! (*Voi la sposa!*)〉(N.6)は男女の会話を巧みに音楽化し、形式も柔軟である。他の楽曲はマルティーノのアリア〈私の主人が男であることは (*Il mio padrone è un uomo*)〉(N.7)が才気に富むのに対し、アルベルト伯爵のアリア〈どんな神聖な務めも (*D'ogni più sacro impegno*)〉(N.5)は妙味に乏しく、フィナーレのアンサンブルもやや常套的であるが、全体の起承転結が巧みなファルサに仕上がっている。

初演は1812年11月24日サン・モイゼ劇場にて、ステファノ・パヴェージのファルサ《やきもち焼きたちへの警告 (*L'avvertimento ai gelosi*)》(1803年)再演との二本立てで行われた(1作のバレエも併演)<sup>23</sup>。初日はまずまずの成功を収めたが、シーズン終了間際のため12月3日までの5回で打ち切られた。最初の再演は1818年11月5日ナポリのヌオーヴォ劇場で《鞆の取り違え (*Il cambio delle valigie*)》の題名で行われ、1820~27年にパルマ、フィレンツェ、ローマ、ミラーノ、ヴァレーゼ、ザーラ、トリノー、ヴェネツィアで上演をみた。国外でも1822年バルセロナ、1826年リスボン、1830年サンクト・ペテルブルクで上演され、1834年にはヴィーンでドイツ語訳の上

演も行われたが、その後は1869年トリノーで一度取り上げられただけで、1892年にペーザロで再演されるまで日の目を見なかった。

- <sup>1</sup> Remo Giazotto, *La carte della Scala. Storie di impresari e appaltatori teatrali (1778-1860)*, Akademos & Lim, Pisa, 1996., p.50. 候補とされた13人のフルネームと生没年は次のとおり——Ferdinando Paer (1771-1839)、Simon Mayr (1763-1845)、Pietro Generali (1773-1832)、Stefano Pavesi (1779-1850)、Giuseppe Mosca (1772-1839)、Luigi Mosca (1775-1824)、Giuseppe Nicolini (1762-1842)、Vincenzo Federici (1764-1826)、Pietro Ray (1773-1857)、Ferdinando Orlandi (1774-1848)、Giuseppe Farinelli (1769-1836)、Pietro Carlo Guglielmi (1763-1817)、Joseph Weigl (1766-1846)。この文書には一流歌手として、ヴェッルーティ、フェスタ、コッレーア、セッシ、コルブラン、マルケジーニ、マッセイの名前が列挙され、好ましくない歌手としてエッケルトとマラノッテの名前も書かれている。
- <sup>2</sup> スタンダール『ロッシーニ伝』邦訳 p.68.
- <sup>3</sup> *Lettere e documenti IIIa*, pp.4-5.
- <sup>4</sup> *Lettere e documenti IIIa*, pp.14-21. フェニーチェ劇場との契約については次章に譲る。
- <sup>5</sup> *Lettere e documenti IIIa*, p.22. リコルディ社は当時《デメトリオとポリーピオ》の小二重唱〈この心はあなたに愛を誓い〉を出版済みだったので(版刻番号118)、続いて1812年に出版される《試金石》のカヴァティエーナとシンフォニアを指すと思われる(版刻番号125と132)。
- <sup>6</sup> 1812年8月21日付。 *Lettere e documenti, I*, pp.34-35.
- <sup>7</sup> *Lettere e documenti IIIa*, pp.23-24.
- <sup>8</sup> *Ibid.*, p.25.
- <sup>9</sup> *Lettere e documenti, I*, pp.37-40. この手紙で未完もしくは骨格の作曲だけでオーケストレーションがまだとされているのは、シンフォニア、第1幕クラリーチェのアリア(伴奏管弦楽パートが未完)、マクローピオのアリア、三重唱、フィナーレ(共に未作曲)、第2幕ジョコンダのアリア、アズドゥルーバレのアリア(共に未作曲)、五重唱(伴奏管弦楽パートが未完)、クラリーチェのアリアに先立つシェーナ(未作曲)。
- <sup>10</sup> *Ibid.*, p.41.
- <sup>11</sup> *Lettere e documenti IIIa*, pp.26-27.
- <sup>12</sup> 初版台本には舞台美術家、衣装制作などの詳しい記載があるが、省略する。
- <sup>13</sup> 当時はオペラの制作が分業制で、レチタティーヴォ・セッコを専門に作曲する人物のいたことが近年の研究で明らかにされている(例、山田高誌による後期ナポリ派オペラの分業システムとジュゼッペ・ベネヴェントやピエトロ・ゴメスに関する実証的研究)。けれどもロッシーニは《試金石》までの作品のレチタティーヴォ・セッコをみずから作曲しており、自筆楽譜の現存する最初のオペラ・セーリア《タンクレーディ》もロッシーニの筆跡で書かれている。
- <sup>14</sup> スタンダールは『ロッシーニ伝』の第4章に、ここで伯爵が繰り返す「封印」を意味する言葉「シジラーラ (Sigillara)」に観客が大喜びし、このオペラの題名がロンバルディア地方で《試金石》よりも《シジラーラ》で知られるようになった、と書いている。
- <sup>15</sup> 初演批評は *Lettere e documenti IIIa*, p.28, n.5 に部分引用。
- <sup>16</sup> 例えばスタンダールが『パリ・マンズリー・レビュー』に寄稿したロッシーニ略伝(1822年)とジェルトルーデ・リゲッティ『かつて歌手だった女の返書』(1823年)。
- <sup>17</sup> *Lettere e documenti IIIa*, pp.28-30.
- <sup>18</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.31-32.
- <sup>19</sup> 1855年にリコルディ社が《なりゆき泥棒、または鞆の取り違え (L'occasione fa il ladro, ossia Il cambio della valigia)》と題して初版楽譜を出版したため、文献にもこの副題が踏襲されてきたが、ロッシーニはその変更に関与しない。それゆえ正式題名は副題なしの《なりゆき泥棒》である。なお、訳題《なりゆき泥棒》は、原作の副題に使われたことわざ「L'Occasion fait le larron (機会が盗人を生む)」の意識として採用した。
- <sup>20</sup> *Ibid.*, pp.33-34.
- <sup>21</sup> 詳細は全集版《なりゆき泥棒》序文 p.XXIV. 及び校注書で明らかにされている。
- <sup>22</sup> *Ibid.*, p.XXVI.
- <sup>23</sup> 該当作はドメニコ・カイアーニ (Domenico Cajani) 作曲《2人の女ライヴァル (Le due rivali)》と思われるが、印刷台本に全シーズンのバレエ作曲者がジュゼッペ・カイアーニ (Giuseppe Cajani) とあり、シーズン前半に上演されたジュゼッペ・カイアーニ《アルジェーアとウラッソ (Argea ed Ulasso)》の可能性もある。